

敬愛する西堂昇牧師(1917-2011)の様々な活躍の中で、私が特に子どもたちに伝えたいことは1955年7月に「フィリピンへの親善使節の旅」を実行なさった記録です。これは民間人としての戦後初めての和解の旅でした。西堂牧師は私の父の親友であり、妹の舅にあたります。



フィリピンは、アジア・太平洋戦争における**日米戦の最大の戦場**であり、最悪の戦禍を蒙った地域のひとつです。日本軍は戦争末期に、『住民にしてゲリラに協力するものはゲリラとみなし肅清せよ』と命令し、いわゆる『戦場の無人化』作戦を実行しました。この作戦において、多くの住民が『ゲリラとみなされ』女性や子どもを含む住民が家ごと焼かれたり、銃剣で刺されたり、崖や井戸に突き落とされるなど、残虐な方法で虐殺され、戦死者は111万人とされています。(「白書・日本の戦争責任:フィリピン」『世界』(1994年2月号より)フィリピンでの住民虐殺は東京における極東軍事裁判でも取り上げられています。

西堂牧師は「私たちはお互いに争いがあった後に和解することは、真に困難なことである。まして、幾多の血が流され、財産が失われた戦争の後の和解ということは至難のわざである。米国のプレスビテリアン教会が仲介の労をとり、フィリピン・ラグーナ・ロス・バニオスのパウル・R・ダトソンが、受入れの凡てを承認という手紙をくださった。アジアに政治上の和平交渉の始まる前に、神様は米国の教会を導き、両国の和解の道を備えて下さった。私はこの任を委ねられて感謝した。自分はたとえ腕の一本を切り取られても、覚悟をしている、というのが四人の者(竹内崑美子、西尾美果、都留春夫、西堂昇)の共通の心境であった。」と書き残されています。

西堂牧師は「私たちはお互いに争いがあった後に和解することは、真に困難なことである。まして、幾多の血が流され、財産が失われた戦争の後の和解ということは至難のわざである。米国のプレスビテリアン教会が仲介の労をとり、フィリピン・ラグーナ・ロス・バニオスのパウル・R・ダトソンが、受入れの凡てを承認という手紙をくださった。アジアに政治上の和平交渉の始まる前に、神様は米国の教会を導き、両国の和解の道を備えて下さった。私はこの任を委ねられて感謝した。自分はたとえ腕の一本を切り取られても、覚悟をしている、というのが四人の者(竹内崑美子、西尾美果、都留春夫、西堂昇)の共通の心境であった。」と書き残されています。

横浜から船出され、フィリピンのルソン、セブ、パネイ、ネグロス、ミンダナオの各島を訪れ、直線距離にしておよそ2300キロを回られました。一行は2ヶ月にわたり、34市町村を訪ね、およそ10万人以上の人々に、教会、大学、高校で出会い、また、市町村長や、議員との、計236回の集会を持ってフィリピンの方々との話し合いを重ねられました。



左より5人目 マグサイサイ大統領、6人目 西堂昇牧師

「一日大体三回から四回の集会をし、夜八時か九時頃、宿に行くと、近所の人々が部屋一杯に集まり、窓という窓に鈴なりとなり、戦時中の日本軍の戦慄すべき残虐行為を語り、夫や兄弟を失った人、虐殺された身内の人々が夜中の一二時、一時まで、つぎつぎに話し、ある人は興奮して叫んだり、泣いたり、私はひたすら、話を聞いて、お詫びし、慰めを語るのみであった。数時間休むと、翌朝は五時前後には次の町へ出発という日程でした。」という非常にハードな旅行となったそうです。また、激しい反日感情にさらされました。

「**イリイロ**で私たちの車は常にジープに乗った警官で護衛されていたが、あちこちで石を投げられた。**レイテ島**には対日感情が激しくわたることができなかった。**ミンダナオ**では日本風の建物がたくさん残されていた。その耕作地帯も荒れ、工場も倒壊して見る影もなかった。**ダバオ**で泊めてくださったお宅の運転手は隙を狙って、私を殺害し、戦争中に殺された兄弟の仇を討つつもりであることを奥様が知り、指一本も触るなときつく諫められた。後で知らされた私は若いドライバーの手を握って、許しを願い、兄弟の霊の上に平安を祈った。泊めてくださった**中国の公使**は、フィリピンのお客様に、『あなた方も日本を許して、この代表の方々を暖かく迎えて欲しい』と演説をした。」

フィリピンの教会は、準備を整え、温かくむかえてくださったそうです。戦後10年目に、フィリピンの方々から、赦しがたい敵である日本人の謝罪を受け入れてくれたことは、本当に感謝です。日本人は加害者として、自覚をはっきり持ち、謝罪、和解の道を進むべきでしょう。